



新型コロナウイルス感染症第7波、崎山小児科の対応

7月になって急増した新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）は今年2月の第6波をはるかにしのぐ大流行となりました。今回の流行では20歳未満の患者数が目立ちます。その一方で、ここ2年間流行が見られなかった手足口病などの夏風邪も流行しているために、発熱する子どもが数多くみられます。7月下旬の時点では、新型コロナの抗原検査、PCR検査をする子どもの陽性率はほぼ半分以下、つまり「熱があるから検査をする」子どもの約半分程度は、新型コロナではなく夏風邪ということになります。夏風邪も増えた、新型コロナも流行している、熱があれば新型コロナかどうか、はっきりさせておきたい。高熱があるので心配だ。子どもの発熱患者の急増で、診療予約枠が一杯になり、受診をお断りすることも増えてきました。また、新型コロナの抗原検査やPCR検査も、院内感染を起こさないように慎重に実施する必要があるので、無制限に検査数を増やすこともできません。そこで、この夏風邪と新型コロナの同時流行について、崎山小児科では、以下のように対応することにいたしました。おそらく今年の秋から冬にかけて、インフルエンザと新型コロナが流行した際にも、同様の対応となると予想します。

1. 出来る限り数多くの発熱等の患者の診察を行います。

熱がある患者は夏風邪や新型コロナだけではなくありません。むしろそれ以外の病気の中に重症な疾患が紛れ込んでいる可能性があります。診察を受けることなく自宅で様子を見ることは、まれではあっても救える病気の治療機会を失うことになりかねません。まずは発熱患者を診察して、病名の診断以前に、急を要する状況かどうかの判断をすることが重要です。

2. 新型コロナの検査については、上限を設定します。

その日の状況によって件数は異なりますが、一日に実施する検査の数に上限を設けます。安全に実施する検査には人手と時間がかかります。そのために検査数を増やすと、受診患者の全体数を大幅に減らすこととなります。検査を受けられないことよりも受診できないことの方が子ども達にとっての不利益は大きいので、やむをえず、しばらくの間、検査件数の制限を行います。

子どもの新型コロナの治療は対症療法だけで早期治療は不要です。慌てて検査を受けても治療が変わらないことも知っておいてください。

猫舌



猫舌は熱いものを飲んだり食べたりすることを苦手とする人の状態ですが、猫が熱いものを食べないことになぞられています。熱いものを食べないのは猫だけではなくありません。人間以外の動物は熱いものを食べないので猫舌です。猫舌は遺伝や生まれつきではなく、舌の使い方に関係しています。人間の舌は先のほうに神経が集中しており、舌の真ん中あたりや奥の方には神経は多くありません。猫舌の人は舌の使い方が下手なので食べ物いきなり熱さの敏感な舌の先につけてしまいます。その結果、食べ物を必要以上に厚く感じてしまい、そしゃくや飲み込んだりすることがうまくいきません。猫舌を克服したい場合は食べ物舌先でむかえるのではなく、真ん中あたりに入れる食べ方を工夫してみるのはどうでしょう。

鳥肌



寒さを感じたり、発熱の直前、怖い思いをした時、感動した時などに肌に小さなポツポツが出ていることを鳥肌が立つといいますが、鳥の羽をむしり取った状態の鳥の肌と似ているため「鳥肌」と言います。関西の方では「さぶいぼ」と言われています。動物の毛が逆立った状態に相当します。自律神経の反射により起こるもので、体温中枢にも支配されています。寒いときに出るのは立毛筋によって毛を逆立てることにより毛と毛の間に空気の層ができて身体から体温を奪われるのを防ぐためですが、人間が毛皮でおおわれていた太古の頃の名残りだと言われています。寒さ以外で鳥肌がたつのは交感神経が興奮、緊張するためです。

本来は「恐怖」「寒さ」などマイナスイメージで起こる現象が刺激が強すぎる「歓喜」や「感動」にも使われるようになっています。

崎山先生の当番日

『府中市民保健センター』042-368-5311

8/14(日)夜間診療(19:30~22:00)

